

よろず見聞記 1 (20160121)

平成 27 年度遺伝子組換え技術に関する情報交換会

<分類：情報交換会>

1月に札幌と帯広で、遺伝子組換え技術をテーマにした情報交換会と講演会がありました。耳を傾け観察すると、これらは目的も対象も切り口も主催者も異なるのですが、共通する背景を持っていました。それは主催者側を駆り立てているものの一つが TPP だったということです。最初に訪ねたのは、札幌の情報交換会です。

<概要>

【日時／会場】 2016年1月21日(木) 10:00~11:40 / 札幌エルプラザ 2F 消費者サロン

【主催者】 農林水産省・北海道農政事務所 消費・案全部 消費生活課(司会)

【協力】 一社)札幌消費者協会

【対象者】 限定)札幌消費者協会(食味テスターさん;食と健康を考える会)30名程度

【場のつくり】 講演(10:05~11:20) Q&A(質問者4人 11:20~11:40)

【情報提供者】 坂本匡司さん(農林水産技術会議事務局 技術安全室 課長補佐)
『遺伝子組換え技術等の先端技術の農業・食品への応用について』

- 【主たる内容】
1. 世界での遺伝子組換え農作物の利用状況(栽培国、栽培面積、主要穀物の輸入状況とGM農作物の栽培状況)
 2. 育種と遺伝子組換え技術の概要(分子レベルで見た育種の原理の説明。コシヒカリとあきたこまち育成史。遺伝子。消化吸収。ゲノム。DNA マーカー選抜育種。遺伝子組換え GM 技術の育種利用)
 3. 研究開発状況(スギ花粉症治療イネ。GM カイコと有用物質の生産)
 4. 安全性確保の仕組み(生物多様性影響評価。食品衛生法・飼料安全法。表示規制。インターネットサイト情報)
 5. 新たな育種技術の紹介 NPBT (New Plant Breeding Techniques)

<個人的感想>

情報交換会も広い意味でリスクコミュニケーションの場です。リスクコミュニケーションの目的の一つは相互理解の深化であると言われてますが、どういう状況を考えればいいのか、誰にとっても難題です。

司会者は最初に「一方通行ではなく相互の情報交流をしたいと考えている」と述べたのですが、「相互」の意味は4人目の質問者に対する坂本さんの回答の中で語られました。「(ラボ段階だからこそ)こういった場を活用して得た皆さんの反応を研究者に伝えたい」とは、つまり、主催者側は情報の流しっぱなしにはせず、反応を研究開発に活かすので相互的だ、という主張です。大切なことです。これは、ソラニンを含まないバレイショ開発に対する「芽を取るだけでいいのに。消費者は望んでいるのか」という質問に対する坂本さんの応答でした。

しかし、研究側がこの反応にどう応じたかを参加者に伝えない限り、参加者は情報が与えられっぱなしだとの認識に留まるのではないのでしょうか。講演者が開発者にその反応を届け、その結果として研究はこうなったあるいはならなかったという物語が参加者に（可能なら同じ）届けられたなら、この会は相互理解の深化あるいは相互作用につながると言えるかもしれません。方法は不問にしたままになりますが、フィードバックは両者に必要なわけです。

最初に TPP だと書いたわけは、二つあります。一つは最初から TPP 後の世界を想定して話しておられたからです。GM 技術を既存技術と位置づけ、世界におけるこの技術の拡大を示す ISAAA の図を示し、GM トウモロコシ・ナタネ・ダイズ・ワタの生産国が TPP 交渉国であると強調し、「(いま以上に入ってくるので) 現実問題として (GM 食品を摂取しているということに) 向き合う必要あり。理解しておこう」と強調されました。参加者の多くは、日本の GM 表示制度が TPP によって反故にされてしまうのではないかと不安を持っていますので、最初からそのように言うのは話し方としては短慮かなと思いました。

二つ目は、意図は別なところにあったのかもしれませんが、使われた言葉などから、新しい育種技術 NPBT が TPP を迎え撃つ (最良の) 技術であるとのメッセージの発信になってしまったことです。果たしてそうなのでしょうか。

8 種類の NPBT の中で 4 種類を発表スライドに入れていましたが、残された時間の都合ゆえか、ゲノム編集技術が強調されました。参加者の多くは GMO から NPBT までの話を平成 26 年度シリーズ学習会への参加を通して耳にしていたので、初めて話を聞く人よりは聞き取りやすかったかもしれませんが、難易度は高かったです。

90 分の持ち時間では、品種改良・GMO・NPBT を話し、十分な質問時間を作ることは難しいのですが、四人が質問しました。人工制限酵素、(一般消費者の) 考えが及ばぬところまでいってしまった GM 技術、求められる情報公開や回数を重ねての説明、消費者ニーズにあった研究開発なのかどうか、等の質問や意見が出ました。回答では、CRISPR/Cas9 (くりすぱー きゃす ないん) という言葉が急に登場し、応答の難しさを、坂本さんを含め一同実感していました。なお、農水省ホームページで情報が公開されていることや、パブリックコメントについても説明されました。

交雑による育種では長い期間かかるが GM 利用の育種だと短い期間で済むという話の文脈で、コシヒカリとあきたこまちを交雑育種の事例 (長くかかる) として挙げていましたが、札幌で使うスライドですから、北海道のイネの品種での育成史を語られたらよかったのと思いました。道産米を食べている人が多いので、残念でした。しかしながら、丁寧に話そうと努力されていたことは伝わってきました。

文責 吉田省子

【言葉】

- ・ ISAAA = 国際アグリバイオ事業団 参考) <http://www.isaaa.org/>
- ・ ゲノム編集技術 = 人工制限酵素などを利用して、目的の遺伝子を狙い通りに改変する技術
- ・ 人工制限酵素 = 人工的に合成した、任意の DNA 配列を認識・切断する酵素。そのうちのひとつが CRISPR/Cas9
参考) <http://www.sci.go.jp/ja/info/kohyo/pdf/kohyo-22-h140826.pdf>
- ・ TPP = 環太平洋戦略的経済連携協定。Trans-Pacific Strategic Economic Partnership